

21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター 2003年度の活動

1. 開所式

日時 2003年9月16日(火) 11:00~12:30
会場 東洋大学白山校舎5号館 井上円了ホール

【プログラム】

(1)挨拶

東洋大学理事長	菅野卓雄
東洋大学学長	松尾友矩
東洋大学大学院委員長	植草益
東洋大学社会学研究科委員長	古川孝順

(2)設立の経緯説明

東洋大学社会学部教授 (HIRC21センター長)	船津衛
-----------------------------	-----

(3)プロジェクトの概要説明

東洋大学社会学部教授 (プロジェクト[1]リーダー)	島崎哲彦
-------------------------------	------

東洋大学社会学部教授 (プロジェクト[2]リーダー)	安藤清志
-------------------------------	------

(4)記念講演

日本マス・コミュニケーション学会会長 十文字女子学園大学学長	鶴木真
-----------------------------------	-----

演題 「進化するメディア、足踏みする人間社会」

2. ワークショップ

(1) 「トラウマ」を語る

日時 2003年9月16日(火) 15:30~17:30
会場 東洋大学白山校舎1号館1405教室

企画者	松井豊 (筑波大学)
司会者	安藤清志 (東洋大学)
話題提供者	松井豊 (筑波大学)
話題提供者	余語真夫 (同志社大学)
話題提供者	吉備素子 ((財)関西カウンセリングセンター)
指定討論者	丹野義彦 (東京大学)

〔企画趣旨〕 阪神・淡路大震災以降、外傷性ストレスに対

する関心が高まっている。従来から心理学の研究や臨床においては心的外傷体験(トラウマ)を積極的に語ることの効用が強調されてきたが、外傷性ストレスの臨床現場ではトラウマを語ることによる危険性も指摘され始めている。本ワークショップでは、トラウマを語ることに限らず臨床実践や研究を展開している3人が、それぞれの立場からトラウマを語ることの効用と危険性について話題を提供する。松井は、消防職員の惨事ストレスケアの実践を通して、トラウマを語ることの精神的効果について疑問に感じたことをお話しする。余語真夫先生には、トラウマを語ることの心理的影響について、(実験室的)研究の動向や研究成果を紹介していただく。吉備素子先生は航空機事故・自動車事故遺族など外傷体験を持つ方々へのカウンセリングを行っており、臨床実践の中でお感じのことをお話しいただく予定である。指定討論者の丹野義彦先生には、これらの話題提供を受けて、社会心理学と臨床心理学の関係についてコメントしていただくことになっている。本ワークショップを通して、トラウマの臨床のあり方について互いに理解を深めるだけでなく、社会心理学が関連領域とどのように関わってゆくべきかについて議論できることを願っている

(2) 集団と暴力、そしてテロリズム

日時 2003年9月17日(水) 16:00~18:00
会場 東洋大学白山校舎1205教室

企画者	西田公昭 (静岡県立大学)
司会者	渡辺浪二 (フェリス学院大学)
話題提供者	西田公昭 (静岡県立大学)
話題提供者	植垣康博 (静岡市)
話題提供者	水田恵三 (尚絅学院大学)
指定討論者	安藤清志 (東洋大学)

〔企画趣旨〕 暴力的な集団に所属する者はもともと攻撃的な個人的素因があるという言説には、社会心理学者は状況的パースペクティブから異論を唱えてきた。しかし知性も教養も豊かでサディストでもない個人が、一体なぜ、ある集団に所属して強固に信念を共有し、自爆、無差別殺人や集団自殺といった過激な違法行為に従事するのかについて、本学会で議論する機会はほとんど見なかった。このテーマは、世界中の人々がテロリズムに関心を高めている今、社会心理学の専門家としては答えなければならぬ極めて重大事だと考える。そこで、この企画では、1970年代に起きた連合赤軍事件、1990年代に起きたオウム真理教事件、そして今も続く暴走族などへと関与する少年非行問題という3トピックについて意見を交わすことを計画した。連合赤軍事件については、70年前後の学生運動に参

加し、最終的にはその集団のメンバーとなって連続リンチ殺人にまでも関与した経験を持つ植垣康博氏をお招きし、その稀な実体験から生々しい集団心理を語ってもらう。またオウム真理教事件については、一連の犯罪関与者に対してこれまで7人の面接調査をしてきた西田公昭が話題を提供する。そして、暴力的な集団と非行少年については、集団と非行との関係について長年にわたり心理学研究を続けてこられた水田恵三氏に話題提供をお願いした。これらの3視点が交差するところで見つけられる共通性や差異性に注目するところから、現代社会における組織的暴力やテロリズムについての理解を深めたい。

(3) 旅行者行動の社会心理学～自己変容の可能性～

日時 2003年9月18日(木) 13:00～15:00
会場 東洋大学白山校舎1号館1405教室

企画者 片山美由紀(東洋大学)
小口孝司(昭和女子大学)
司会者 片山美由紀(東洋大学)
話題提供者 川上和久(明治学院大学)
話題提供者 佐々木師二(関西大学)
話題提供者 片山美由紀(東洋大学)
話題提供者 小口孝司(昭和女子大学)

[企画趣旨] 旅行は日本に限らず世界中で老若男女を問わず人気の高い活動であるが、残念ながら社会心理学の観点からの研究は数少ない。自己変容等の問題も含め、ひろく「旅行に関する社会心理学的研究」全般への関心が高まることを願って本ワークショップが企画された。当領域の研究は本学会では端緒についたばかりであることから、話題提供を4名として研究状況を俯瞰する。その後はフロアを交えて全体討論としたい。

最初に川上和久先生には、レジャー白書などの調査データをもとに、社会の変化にともなう日本人の余暇意識の変容を追いながら、現在の余暇政策との適合性について、25分ほど報告いただく。レジャー白書データを共同で分析してきた米村恵子先生(江戸川大学)、柳田尚也先生(財団法人社会経済生産性本部/元(財)余暇開発センター)にご協力いただく。佐々木土師二先生(『旅行者行動の心理学』関西大学出版部)には(観光)旅行者行動の包括的モデルを示して、そこから生まれる多面的な社会心理学的課題と仮説について25分ほどお話しいただく。片山美由紀は生態学の観点で、ライフステージ内の生活刺激が多く刺激飽和すると高負荷の旅行を避け、逆に過少刺激環境では3種の旅行をする事を示すサンプリング調査について20分お話しする。小口孝司先生には観光行動に関するいくつかの実証的研究と、それらの相互関連について20分ほどお話しいただく。八城薫先生(昭和女子大学大学院)にご協力いただく。最後に旅行に関する社会心理学的研究の今後についてフロアをまじえた全体討論を行う。

(4) 被害と被害者の社会心理学

日時 2003年9月18日(木) 15:30～17:30
会場 東洋大学白山校舎1号館1307教室

企画者 黒沢 香(千葉大学)
司会者 黒沢 香(千葉大学)
話題提供者 片山 徒有(あひる一会代表)
話題提供者 岩田さゆり(被害者支援グループ主宰者)
指定討論者 細井洋子(東洋大学)
指定討論者 杉森伸吉(東京学芸大学)

[企画趣旨] 「何の罪もない人が被害を受ける」という不条理に耐えられないと、人は被害者を責めるようになる(Aronson)。それほど極端でなくても、社会一般は被害者に対し冷淡な傾向にある。敬遠して、あまり関わりたくないのかも知れない。その点で社会心理学者も、差別の研究は別として、つい最近まで同じであった。しかし少しずつ変化が見られ、災害被害者の研究なども始められている。このワークショップでは、被害と被害者をテーマに、被害者や遺族の体験と視点を社会においてどのように活かすか、関わり方や支援はどうあるべきか、社会心理学は何をどのように研究すればよいのか、そして

この問題に何ができるのか、何を学べるのかなどを検討したい。

最初に、「あひる一会」代表の片山徒有さんと犯罪被害者支援の活動を行っている岩田さゆりさんに話題提供をお願いしたい。片山さんは交通事故でご子息を失う経験をされた。その後の司法関係者や報道関係者などとの経験を出発点に、個人と社会の関係を問い直し、あるべき社会の姿や人の生き方などを探っている。岩田さんは被害者を支援する活動にずっと関わってこられた。お二人にご経験をお話しいただくとともに、社会心理学者への期待と要望を語っていただく。多くの会員が参加し、活発な議論が行われることを期待している。

3. 第1回シンポジウム

「心身の障害とライフストーリー研究」

日時: 2004年1月31日 14:00～16:30
会場: 東洋大学白山校舎1号館1307教室

司会者 船津 衛(東洋大学)
話題提供者 能智 正博(東京女子大学)
話題提供者 稲沢 公一(東洋大学)
話題提供者 田垣 正晋(大阪府立大学)
(シンポジウムの概要については本誌 76-77 頁を参照)